

「カリキュラム・マネジメント」の 実践のために 「題材のつながり」を 活かす

東京学芸大学附属小金井小学校 教諭
大塚 健太郎 (おつかけんたろう)
兵庫県生まれ。横浜市内の公立小学校教諭、東京学芸大学附属小金井小学校、世田谷小学校教諭を経て、現職。国語授業づくり研究会代表。

東京学芸大学 准教授
中村 和弘 (なかむらかずひろ)
愛知県生まれ。川崎市内の公立小学校教諭、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭を経て、現職。専門は国語科教育学。中央教育審議会「国語ワーキンググループ」委員、「言語能力の向上に関する特別チーム」委員。

中村先生からカリキュラム・マネジメントにおける「学びのつながり」を三つ挙げていただきました(本誌・24号)。
「一つ目は「言語活動のつながり」、二つ目に「題材のつながり」、三つ目にその他として「言葉や思考のつながり」。
今回は「題材のつながり」について、大塚先生と対談いただきました。

「題材のつながり」を意識し「立体的に」学ぶ

中村 大塚先生が「題材のつながり」を工夫された授業実践にはどんなものがありますか。

大塚 3年生の国語の説明文「めだか」と理科の「花や虫を探そう」をつなげた実践や、5年生の国語の説明文「天気予想する」と理科の「天気の変化」とをつなげた実践などがあります。

例えば国語で「天気を予想する」を読んだ後に、理科で天気の変化の学習をすると、天気を予想する大変さを実感できます。また、理科では雲の動きと天気の変化、台風の動きを科学的に学びますが、国語の文章から科学技術の進歩に興味・関心を広がり、情報をもって理科の学習を始めることもできます。

中村 なるほど。天気という題材を関連させながら学ぶことで、子どもが立体的に天気を考えたり、天気を見たりできるようになるのですね。

大塚 例えば理科だけの学習では興味をもてなかったけれど、天気予報の精度の向上を知ること興味をもつこともあります。「立体的に」広く情報が学べるというか、相互補完の関係になります。

中村 理科と国語の双方の学習への興味が高まりますね。

一方で、理科は理科でつけた資質・能力があり、国語は国語でつけなければいけない力がありますから、「天気について興味をもつ

た」というだけでは、まだ第一段階というか、その先があるわけですね。うまくやらないと、どっちつかずになってしまうのでは？

大塚 理科固有の何を教えなければいけないのか、指導内容をちゃんと理解しておかないといけません。国語では「天気を予想する」からテキストと表とをリンクさせながら読む、国語固有の技能的なことを学んでほしい。だから、どっぶり中に入ってしまうのはなかなか難しいのですが、低学年の生活科とのリンクはしやすいと思います。

例えば2年生の国語の説明文で「たんぽぽ」という教材があります。生活科では実際にたんぽぽを観察しながら学びますが、子どもの観察だけではたんぽぽ一枚一枚の花びらがどうなっているかまでは気づきません。でも、説明文を読むと「あれは全部花なんだ」ということが内容知としてわかる。すると「もう一

回見てみようか」と、内容の行ったり来たりができます。

中村 新しい学習指導要領では「生活科を中心に、総合的・関連的な指導の工夫を」と総則にうたわれています。

低学年のつながりを意識した実践はほかにありませんか？

大塚 2年生に工作の手順を説明する「きつつき」という教材がありますが、自分たちでおもちゃをつくり、その手順を説明文に書くことはよくやります。

「泣いた赤鬼」など、鬼が出てくる作品を集めて読んだり、紙芝居に書いたり、絵に描いたり、「どんな鬼だろうね」と想像したり…。昔話を広げた図工、図書館活用の開発単元もあります。

中村 国語科の中の鬼をテーマにした昔話単元ですね。節分や豆まきなどの行事とつなげたり、道徳とつなげたり、森羅万象、いろいろなことがテーマとしてつなげられそうですね。

つながりの見通しをもって 教員間の意思疎通を図る

中村 以前から各科的な授業の工夫や、総合的な学習の時間と教科

の学習を関連つけることはあったわけですが、大塚先生が気をつけていらつしたことは何でしょうか。

大塚 それぞれの教科固有の指導事項をきちんと押さえているかどうかを確認することが大事です。あとは、朝から晩まで鬼一辺倒になってしまふようなことがないようにする。子どもが乗っていればいいけれど、子どもが気分転換できなくなるとまずい。国語でも鬼、道徳でも鬼というようになると、バランスが難しいなと思います。

中村 「学習の興味期限」ということをベテランの先生はよくおっしゃいますが、つなげれば効果的ではあるけれど、一方で飽きてしまうこともあり得ますね。

大塚 入れ込み具合に気をつけなさいといけません。

例えば理科が専科の場合には、専科の先生と事前に情報交換をしておかないと、つなぎが悪くなる。「えー、もうそっちでやっちゃったの？」というようなことがあるので、教員間のコミュニケーションは大切だと痛感しています。

中村 題材をつなげてやろうというときに、教科によっては教える先生が別々の場合もありますからね。



ところで、一年間の学級経営の計画やつながりの見直しは、どうやって立てるのですか。どのような順序で、実際の授業化までつながりを考えていくのでしょうか。

大塚 4月初旬、担任学年が決まった段階で、一年間の題材や指導事項をザッと押さえます。学校行事をにらみながら、リンクが張れそうなものや、順番を入れ替えたら出来そうなもの、おおまかな見通しを立てます。

あとは実際に授業が始まってから、子どもがどこに興味をもっているかによって計画を変更します。題材をつなぐことで子どもたちが乗るかどうかは、学級の様子を見てみないとわかりません。

学びのネットワーク化

「学びのつながり」3要素

- ① 言語活動のつながり
- ② 題材のつながり
- ③ 言葉や思考のつながり

だから「なんとなくつなげられたら面白いな」という青写真ももっているけれど、つなげるかどうか、実際に踏み込むのは、目の前の子ども次第ですね。毎年、3年生だから、「めだか」と「身の回りの生き物の様子」をくっつけてやるとか、理科の昆虫調べの前に説明文「ありの行列」をもってくるかというところ、そうではない。

例えば最初にお話しした「めだか」のときは、子どもたちが教室でヤゴを飼っていたんです。トンボにかえっていったヤゴを、すごく大切に育てた経験がある子どもたちだからこそ、国語で「めだか」を読んだときに面白いことがおきそうだと思います。あえてくっつけてやりませんでした。

中村 そうすると、3年生で「めだ



教科を横断して題材をつなぐことで、「見方・考え方」が相補的に育つことを期待したい。(中村)

か」の説明文があつて、理科で「花や虫を探そう」があるから全国どこでも3年生でつなげると効果的ですよ、とは必ずしも言えない。つなげればいいというものではない、ということですね。

大塚 モンシロチョウを卵からふ化させて、チョウが飛んでいる教室では、「めだか」とつなげた授業はかえってやりにくい。ですから、それは別個にやったほうがいいな、と思います。

中村 大塚先生が、題材を入れ替えてつなぐのは、全体から見るとどのくらいの割合ですか？

大塚 入れ替えてまで題材的につなげるのは、学年で一つくらいですね。「言語活動のつながり」は、かなりつなげられますけれど、内容を合わせるとなると、それぞれの学び



くるはずですよ。

中村 教員の経験値の重なりもあるけれど、それはそれで毎年全員がやっていると大変だから、学校ごとに「前の学年はこういう題材のつながりでやったら、うちの子たちはすごくうまくいったよ」といった財産をきちんと残しておくことは大事ですね。実績という事例をそれぞれの学校ごとに集積しながら、それを踏まえて、また次の学年はちょっとトライしてみるとか。

大塚 残していくことによって形骸化していくのは怖いという思いもあります。つながりやすさは、そんな



つなげる先の教科の指導内容を押さえ、「入り口」や「材料」として使う発想ももちたい。(大塚)

の順があつたりしますから。
中村 いつも関連づけようというのではなく、どこがいちばん効果的か精選しながら、なおかつ実際の学習を通して、最終的にはこれだ、というように直前に微調整してやっていく。ある種の慎重さが必要ですね。

大塚 高学年は総合的な学習の時間をうまく取り込める可能性はあります。例えば「白神山地」を取り掛かりとして総合的な学習の時間でいろいろなことを調べる。「平和のとりでを築く」といった平和教材を読んで、平和についてもっと広げていくといった具合に、「入り口」として使う、「材料」として使うということではできないと思います。

中村 とくに新しい学習指導要領では「見方・考え方」というキーワードが入ってきました。一つの題材を例

にたくさんはないので、それが「今回の子どもたちには可能か」とか「この地域でうまくいくか」というふうに見ていけばいいと思います。

先生の力量、視野の広さが要

大塚 理科以外では、国語科の伝記教材は社会科学の歴史とつながりますね。同じ時代で伝記を読めそうな人を集めてみて、入り口に使うというのもできそうです。

中村 小学校では難しいのですが、社会科学で歴史的な事実を学ぶときに、国語科では「平家物語」から当時の武士たちの想いを知る。人間ドラマとして歴史を学ぶ。これは文学のなせるワザです。教科の特性を活かしながら立体的に学ぶことができたらいですね。

大塚 子どもの中で前後の歴史がわかるとつながって動き出す。「そうか。あの人物が、この時代に生きていたのか」というようなことは往々にしてあるので、教師が橋渡しのトークができるのも大事だと思います。

中村 ちょっとしたひとりで「あれでやった〇〇がこれか」と、子どもの中でストンと落ちる。教師の

えば総合的な学習の時間、国語、理科で扱うことで、それぞれの「見方・考え方」が相補的に育つことが期待されます。一緒に学ぶなり、順序性をもたせるなり、新しいやり方がありそうです。「見方・考え方」を具体的に育てるといった意味で、題材のつながりを意識したカリキュラム・マネジメントもできそうです。

学校全体でつながりを意識する

中村 「題材のつながり」の可能性や難しさについて、若い先生方にアドバイスをいただけませんか。

大塚 私自身も、ついつい国語を中心として考えがちなのですが、つなげる先の教科のこともちゃんと学んでおかないとダメだな、ということだと思います。そうでないと「借り

ひとやいろいろなことがつながることがありますね。

大塚 理科のときに「国語で読んだよ」とちょっと言えるかどうか。その先生の力量というか、視野の広さが問われますね。

中村 「題材のつながり」を考えることから、教科の「見方・考え方」、アプローチのしかたも、見えてきます。何でもつなごうとするのではなく、年に一回でも合科的に学ぶことを意識してみる。学年間、単元間のつながりを意識して授業されている先生もいらしますが、それが学校全体に広がるか、と思います。学年だけではなく、学校全体ですっきりしたものがないと、その時間その時間を見ているだけではその発想は広がりにません。学校や学年の中で、計画しながらやっていくのが大事ですね。

大塚 学校全体で英知を出し合っで貯めていく、つくっていくという意識を皆さんがもてば「私はこういうふうにはやっていきますよ」と言えますよ。

中村 一年で出来上がりではなく、次の年もまた次の年も続けていく。その財産をまた検証してみることも大切だと思います。